



参加者からは「準備はしていたつもりでしたが、足りていない点に気づきました。二高齡犬の場合、避難方法を変更する必要があると感じました」といった声が寄せられ、知識を「知っている状態」から「見直す段階」へ進む機会となりました。

〔11月27日一沢〕
何もしないでいた人が「始めよう」と決めた理由

続く11月27日には、代沢のpawlive plus and plantsにて同様のイベントが実施されました。こちらでは、ペット防災の専門家に加え、能登半島地震で被災した犬の保護を現在も続けている、認定NPO法人「AZZY DOG LIFE」代表でドッグトレーナーの小林朋紀氏が参加しました。

現場経験を踏まえた話の中で、繰り返し語られたのは「準備不足は、選択肢を奪うという事実です」という言葉でした。

避難を断念せざるを得なかった例しつけやクレート慣れができておらず受け入れを断られた例、情報がなく飼い主と犬が離れ離れになった例、いずれも特別なケースではなく、どの家庭にも起こり得る状況として紹介されました。

この回の参加者アンケートでは、「これまでに全く準備していませんでし

- ✓ フィードや水を何日分用意しているか
- ✓ 愛犬の写真や情報をすぐに提示できるか
- ✓ クレートに入ること拒まないか
- ✓ 他人の手に委ねる状況を想定できているか

今回の2つのイベントを通して浮かび上がったのは、防災は知識量や意識の高さではなく、「どこまで具体的に決めているか」という点でした。

防災は、意識ではなく判断の積み重ねです

事後アンケートでは、「ある程度準備していましたが、もっと見直そうと思いました」「全く準備していませんでしたが、始めようと思いました」と、参加者の多くが内容に納得し、周囲へ共有したいと感じていることが分かります。

数字が示した、行動への変化

だが、始めようと思いましたが「まずは写真撮る、カードを作るなどできることが明確になりました」といった声が多く、意識の変化がはつきりと表れました。



pawliveplus
犬と人が自然に共に暮らせるまち
PAWLIVE TOWN（パワ livetown）を目指します。

どれも難しいことではありませんが、決めていなければ非常時に選択肢は残りません。事後アンケートに多く見られた、「準備して」と思っていました」「何もしてなかったことに気づきました」という声は、不安を煽られた結果ではなく、現実を具体的に知った結果でした。

防災は「知識を集めること」では終わりません。日常の判断に組み込めているかどうか問われます。

2026年を迎え、愛犬との暮らしの中に「もしもの時、どう動くか」という視点を加えることは、特別な備えではありません。今回の取り組みは、準備の有無を競うものではなく、「何を決めているか」に気づくための時間でした。その気づきが、次の行動につながるかどうか。答えは、それぞれの暮らしの中にあります。

「犬との防災を考える」イベントレポート

ペット防災は、“知っている”では守れない。 今年こそ、“もしも”を先送りにしない。



ペット防災は「知っている」では足りない
世田谷で行われた
啓発イベントが示した現実

災害時、ペットと共に避難できると考えている飼い主は多くいらっしゃいます。しかし現実には、避難所の受け入れ体制や備蓄は十分とは言えず、状況は自治体や施設ごとに大きく異なっています。

こうした現状を踏まえ、犬と人が自然に共に暮らせるまちづくりを目指す「pawlive plus（パワ livetown）」が主催となり、ペット防災啓発イベントが11月、世田谷区内で2回にわたって開催されました。

pawlive plusは「PAWLIVE TOWN（パワ livetown）」という構想のもと、日常の暮らしの中に「備え」を組み込み、非常時にも犬と人が共に行動できる社会をつくることを目的に活動しています。

今回のイベントで一貫していたのは、防災を「知識として教える場にするのではなく、各家庭が自分たちは何を決めているのか」に気づき、行動を選び取るきっかけをつくることでした。すべてを網羅するのではなく、「よし、これならでき」と一歩踏み出してもらうこと。それが、pawlive plusがこの啓発イベントを継続して行う理由でもあります。

〔11月21日一沢〕
専門家と向き合う、
避難の現実と行動の差

11月21日、砵のEASE CLUBにて、夜の時間帯にペット防災イベントが開催されました。仕事終わりでも参加しやすい時間設定のもと、ペット防災の専門家を迎えたトークセッション形式で進行了しました。

テーマとなったのは、「避難所に行けば何とかなる」という思い込みと現実の差です。

過去の災害事例をもとに：

- ✓ ペット同行避難が原則であっても、実際には受け入れ条件があること
- ✓ フィードや水、クレートなどが避難所側で用意されていないケースが多いこと
- ✓ 迷子や逸走が発生した際、情報がなければ捜索が困難になること

などが具体的に示されました。

また、ヒューマンドッグトレーナー須崎大氏が登壇し、「避難時に必要な特別な訓練ではなく、日常の延長にある行動です」と述べ、クレートに入る、他人に預けられる、環境の変化を受け入れられるといった基本行動の重要性を解説しました。